

北京語文語音の起源

中村雅之

1. はじめに

北京語の漢字音の中には、文語音と口語音の二種を併せ持つものがある。例えば、角(jue, jiao)、削(xue, xiao)、着(zhuo, zhao)、白(bo, bai)、色(se, shai)、得(de, dei)などである。また、学(xue, xiao)、百(bo, bai)などのように、かつては二種が用いられたが、今では一方のみが通用しているものもある。学、略、約、客、徳などは文語音のみが伝わっており、百、拍、酪、黒、賊などは口語音のみが伝わっている。

文語音は比較的硬い語彙に用いられ、口語音は口語的な語彙に用いられることが多いため、文語音(または読書音・文言音)・口語音(または白話音)と呼ばれているが、文語音が口語的な語彙に用いられたり、口語音が硬い語彙に用いられたりすることも稀ではない。文語音と口語音とは、語彙の硬軟による区別ではなく、その音形の区別に対して与えられたものと理解すべきである。宕江摂入声で「-ue, -o, -uo」となるものが文語音、「-ao, -iao」となるものが口語音であり、同様に、曾梗摂入声において「-e, -o」となるものが文語音、「-ei, -ai」となるものが口語音である。通摂の例は僅少であり、今省略する。

2. 長田夏樹氏の考察

北京語の文語音と口語音の問題を初めて体系的に扱ったのは長田(1953)である。北京語の二系列の音を、『老乞大諺解』(1670)の右側音および『中原音韻』(1324)と比較して検討した。その結論として次のように記している。

結論のみを言へば、北京語は入声脱落に際し glottal stop を持たなかったA方言と、glottal stop を持ったB方言とが接触して出来たA-B方言に、更にB方言と同系の言語が、読書音として入って来たもので、A方言・B方言の混合は多分山東で行なはれ(登萊地方の方言がA方言であって、遼東でA-B方言になったとも考へられる)遼東を経て北京に入り、B系読書音が入って来たかと考へてある。B系読書音としては南京方言が考へられる。

ここで文語音の起源として南京方言を挙げているのはさすがである。ただし紙幅の関係もあり、その具体的な根拠は示されなかった。

文語音と南京方言の関連を示唆した長田氏の重要な指摘は、残念ながら、その後

十分に受け止められなかったようである。平山久雄(1960)は「北京口語の基礎的部分の祖先をA方言とすると、入声の変化状況がそれと異なるB方言があって、B方言が文化的政治的に優位な方言としてA方言に強い影響を与え、その結果、A方言は文語的語根を大量にB方言から借用することとなった、と考えられる」と述べるに留まり、具体的な方言との関係には触れていない。佐藤昭(1979)は北京語文語音と河北省靈寿方言との近似性に触れるが、南京方言は検討の対象としていない。

3. 南京官話の影響

中村(2006b)で述べたように、「学/hio/>/cyə/」、「得/tə/」などの北京語文語音は「学/hioʔ/」、「得/təʔ/」という南京官話音の模倣による音形と見なすのが最も妥当だと思われるが、70年代以前にはそのような主張はほとんどなかった。その理由は恐らく、当時はまだ南京官話の実態がよくわからなかったことによるのであろう。西欧宣教師によるローマ字資料のほとんどが南京官話に基づくものであり、明清代においては南京官話が北京語に劣らず影響力の大きなものであったことが理解されるようになったのは、80年代後半以降のことである(明清代の南京官話については古屋昭弘1998、高田時雄1997などを参照)。その意味で、長田(1953)が今から半世紀以上も前に、北京語文語音を南京方言と関連づけようとした慧眼には驚くべきものがある。

4. 口語音資料の開拓

かつての北京語文語音の研究の停滞には、口語音資料が十分に開拓されていないことも影響していたと思われる。清格爾泰等(1985)によって契丹文字の漢語音表記が解読されるや、近世音の起源が遼代にあることが確認され、さらに北京語口語音が10世紀以来の伝統的な北方音を受け継ぐものであることが疑いのない事実となった。また、一部の研究者によって南方音として位置づけられることのあったパスパ文字漢語表記も、契丹文字資料を含む北方音資料と比較すれば、韻母において10世紀以来の伝統的な北方音の音形を示していることは明白である。

長田(1953)以降に発見されたいわゆる『翻譯老乞大』のハングル注音のうち、左側音も北京語の口語音に連なる伝統的な北方音の音形を示している。パスパ文字や『翻譯老乞大』左側音がただちに北方口語音と認識されなかったのは、外見上濁音声母の範疇が独立していること、そしてハングル表記に入声韻尾らしきものが記されていたことによるが、それらはすべて伝統的な韻書や韻図の体系を理論的に組み入れたもので、現実音の反映ではない(中村2006a参照)。むしろそれらを取り除いて韻

母の音形を見れば、そこに紛れもない北方音(北京語口語音と同質のもの)が確認できるのである。

5. 文語音流入の時期

文語音の考察にとって重要なことは、上に挙げた北方音資料(契丹文字漢語、パスパ文字漢語、『翻訳老乞大』左側音)に、北京語文語音に相当する音形が現れないことである。そして『翻訳老乞大』右側音に至ってやっと口語音だけでなく文語音の音形も記されることになる。『翻訳老乞大』の左側音は現存する『洪武正韻訳訓』と同様に15世紀半ばの北方音(おそらく北京音)を伝えるものであり、右側音は16世紀初頭に崔世珍によって観察された北方音である。これらの状況より、北京語に文語音が浸透したのは15世紀半ばから16世紀初頭の間、すなわち15世紀後半と考えられる。14世紀末に首都南京の方言を基に生まれた官話が、北京遷都によって北京語にも大きな影響を与えることになり、15世紀後半までには文語音を形成することになったわけである。

6. 南京官話の影響の実例

15世紀以降、北京語に対して南京官話は様々な面で影響を与えた。音声面での最も大きな影響は上に述べた文語音の生成であるが、その他にも果摂一等の韻母の音形も南京官話の影響を受けている。これらは当然のことながら語彙の受容に伴って北京語に流入したものである。一例として、ここでは中村(2008)でも述べた「我們」の例を挙げておく。

果摂一等開口の韻母は、『翻訳老乞大』左側音の伝える伝統的な北方音では非円唇の「e」(/ə/)であり、「我」の発音も「e」(/ə/)であった。また北方の複数語尾は一般に「毎/məi/(陽平声)」であり、「われわれ」は「我毎/ə məi/」であった。ところが明代の官話では「我」は/ŋo/、そして複数語尾は「們/mən/」であり、「われわれ」は「我們/ŋo mən/」であった。官話の「我們」は北京語にも入り込んだが、北京語には声母/ŋ/がなく、また単母音の/o/もなかったために、官話/ŋo mən/を/uə mən/として受け入れた。(/uə/ の実際の音声は現代語と同様[uo~uo]であった) つまり、15世紀の北京語では複数語尾「們」が浸透するとともに、「我」が/a/から/uə/へと変容した。その状況をしめすのが『翻訳老乞大』右側音で、「我」がハングル「o」で表音されている。ハングルでは構造上「u」と「o」の連続は表記出来ないの、ここでの「o」は[uo]を表しているを見てよい。「我」の左側音の表記が非円唇の「e」であるのに対して、右側音が円唇の

「*o*」で表記されることの意味は、官話在北京語の中に浸透して多くの語に新たな音形を形成したという背景を知ることによって、初めて解明されるのである。

7. まとめ

過去に多くの研究者が試みたように、北京語の成立を周囲の方言との比較によって探ることはもとより意味のあることである。しかし、北京語音の考察にはまず、その口語音が10世紀以来の伝統的な北方音であり、文語音が南京官話音の模倣によって生まれた音形であるという大局的な視点を持つことが必要ではなかろうか。

最近、『長田夏樹先生追悼集』が刊行され、そこには北京語の口語音と文語音の分析をおこなった長田(1953)も収録された。喜ばしいことである。長田氏は多岐にわたる研究において、多くの斬新な発想を提示した。それらの発想の種を一つ一つ拾ってゆくことも我々後進の務めであろう。小稿をなした所以である。

参考文献:

- 長田夏樹(1953)「北京文語音の起源に就いて」『中国語学研究会会報』11. のち『長田夏樹先生追悼集』pp.45-49所収、好文出版、2011.
- 平山久雄(1960)「中古入声と北京語声調の対応通則」『日本中国学会報』12.
- 佐藤昭(1979)「北京語の口語音と文語音:特に中古中国語の曾・梗撰一・二等入声字を中心に」『横浜国立大学人文紀要. 第二類, 語学・文学』26.
- 清格爾泰等(1985)『契丹小字研究』中国社会科学出版社.
- 高田時雄(1997)「清代官話の資料について」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』.
- 古屋昭弘(1998)「明代知識人の言語生活—万暦年間を中心に—」『現代中国語学への視座—新シノロジー・言語編』、東方書店.
- 中村雅之(2006a)「翻訳老乞大朴通事の左側音の入声表記について」『KOTONOHA』41.
- 中村雅之(2006b)「翻訳老乞大朴通事の右側音」『KOTONOHA』42.
- 中村雅之(2008)「北京音「我*wo*」の例外性について」『KOTONOHA』67.